

「鳥熊」の春木座興行の記録

明治の劇界に團十郎の活歴ほど、大きな影響を残したものはあるまい。あの早い時代に大衆に請容れられないあの活歴を、お客が三人になるまで続けると團十郎が決心の臍を固めたといふがさうまで固めしめ、續かしたは、興行師の守田勘彌が偉かつたからで、守田勘彌は大したものと、私はいつも思つてゐる。上方に一人の勘彌が出たなら、中村宗十郎の藝は、もつと延びたらう。「上方の團十郎」を作つたかも知れぬ。その上方の興行師に彗星の如く現はれた一偉才があつて、明治十八九年に互つて東京の春木座を借りて純上方の芝居を興行した。——「鳥熊の芝居」と、今日でも話に残つてゐるのは、これである。今日「鳥熊の芝居」の名は、尙傳つてゐるようが案外その内容を知る人が少い。どんな芝居であつた？　といふのでなく、どんな興行をした？　——を記録的に述べておかう。それは今日松竹あたりがやつてゐる興行法が、當時の鳥熊の興行そのまゝの踏襲が多いのに興味が深い。

鳥熊の素性

「鳥熊」は三田村熊吉といつた。伊勢松坂で、「鳥茶屋」を興行してゐたからの「鳥熊」である。「鳥茶屋」は、軍鶏屋ではない。諸鳥、諸動物の小園、淺草の花屋敷といつたやうな興行物であ

る。熊吉は慶應元年に神戸へ出て、さる洋人に一疋の曲猿を買うた。この曲藝の猿を資本に支那へ渡つた。——西洋までも行つた。と傳へるが、どの程度の「西洋」か明かでない。明治の初年に歸つて來た鳥熊は、一匹の大象を土産に持つて來て、近畿地方を、所謂「高物屋」として歩いた。その頃の一匹の大象は、結構商賣になつたものらしい。大阪松島八千代座の座主吉田卯之助氏の先代も、象で儲けた「高物屋」であつた。

鳥熊の大象は巡業中に、大和國十市郡小房で死んだ。その象の屍骸は、小房の觀音地内に葬つた。

この象で儲けた金を引携げて、大阪へ飛込んだ。旅に經驗のある鳥熊は、芝居興行でお釜を起さうと發願した。道頓堀三榮——三河榮吉の手に抱えてゐた市川右團治(後の齋入)、中村駒之助尾上多賀之丞、市川鰻太郎を抱えて、中國筋から四國路へと渡つて、安値芝居を打つた。今日でも大阪の名優として右團治の名が、中國四國に籍甚たるのは、この時の右團治の長期の旅興行から初まる。

明治十年に大阪へ戻り、新たに中村芝翫、片岡松太郎等の一座を組んで九州一圓を巡業した。そして道頓堀中座へ歸つて、鳥熊一流の安値芝居興行を企てたのだが、當時道頓堀の各座は驚い

て故障を申立て、中座の貸賃借を中止せしめた。鳥熊は大阪へ入らうとして芝居小屋のポイコツトを喰つた。ソレほど鳥熊の興行法が既にセクションを起してゐた。今日でもよくある手だ。

勢に乗じた鳥熊は、新町の貸座敷が不況で大きなお茶屋ほど、経営困難で商賣は休む、——といふに眼をつけて、新町座、越後町、今日の南通二丁目で、大きな屋臺骨を擁して大戸を閉ぢてゐた高島屋といふ揚屋を借りて、早速の手入れ營繕で、劇場に模様替へをして、元の名をソノままに高島座として、開場したのが、明治十四年三月、俳優は中村芝翫父子で、今の歌右衛門が養父芝翫と共に子役上りの兒太郎で、高島座へ乗込んだ。芝翫の出し物は、『八陣』の加藤、『目貫の後藤』で、切が、『六歌仙』であつた。この興行木戸八錢であつたから、「芝翫(四貫)の芝居が一貫で見られる」と言つたのは、一貫文は銅貨八錢と同價額であつたからだ。この一座に中村鶴五郎といふ役者がゐるが、これが今日の市川中車である。「芝翫の芝居」が一貫で見られても、大阪の芝居興行物は南に限つたといふ土地の習慣があつたから、高島座の人氣が薩張立たない。流石に鳥熊だ、思切りよく數日で木戸を閉ぢた。座の普請その他で、鳥熊は約三千兩の痛手を負うた。日残りの芝翫以下の俳優を連れて、江州路の旅へ出ようとしたが、俳優が故障を申立て、肯

かない。高島座の契約で旅の話ぢやないと主張して旅での日残りを認めない。俳優と太夫元とのこの紛擾で、兩者の手が切れた。

鳥熊は三千兩の大穴の上に、役者がなくなつたのだから次の興行に差支へた。

鳥熊春木座で新興行法の實施

この時、松坂の産れで、先年鳥熊の肝煎で、出版し、衣裳屋を初めてゐた荒木屋といふがあつた。鳥熊のこの窮境を見て、大阪の衣裳を貸した。そして「大阪の衣裳」といふのに思付いて、悉くを「大阪色」で塗り揃へようといふ考案を立て、囃子連中淨るり太夫、役者は申すに及ばず「大阪仕立」を賣ものに上京した。この時の役者は、嵐鱗昇が中心であつた。時は明治十八年五月一日が初日で、本郷春木座を賃借りした。——これが所謂東京に於る「鳥熊の芝居」である。この時の連名を記すと左の如し。

尾上 松壽	市川 秀藏	中村竹三郎	中村 千若	中村 鹿昇	中村 鶴藏
中村 駒梅	實川 芦藏	實川小延童	淺尾 大朝	淺尾吉三郎	中村 駒雀
尾上梅次郎	市川 瀧助	中村 梅作	市川鯉之丞	中村竹之助	中村 千瓶

市川 助平 澤村國五郎 中村金駒郎 嵐 佳十郎 中村 福六 市川福之丞
中村 若松 嵐 鱗 昇 市川駒三郎 市川 駒丸 尾上 枅藏 (順序不同)

この連名番付の下に左記の如き口上がある。

御一人まへ

一木戸代六せん

大阪しばいやくしや。いつとうはやし。たゆう三味せん。いしよう。こぎれのこらずとりそろへ。おゝ
さかのとうりにして。御らんに入候

右ねだんにてこや八分どをりしきりなき。ところのこらずゆきしたい。ばだい しきものだい。ぜにい
らず。きやうげんは十五日がわりにしてごらんに入れもうし候

これと同時に繪番付と口上番付を市内に配布した。口上書には、「大阪風の芝居」といふことを強調してゐる。また「初日より五日の間は朝八時迄に御越しの方へは御披露のため木戸錢六錢にて外に七月卅日まで通り升六錢の通札を一枚つゝ差上申候」とあるから、五日間は早い者に法樂制度。「来る七月三十日迄休みなしにて興行」を觸出し、下足料は無料、「茶水など御入用の方へは無代價にてさし上候」——といふサービス振りである。

この下足料無料の上に、下駄の泥を洗つて、十文字に對角線に紐をつけ、一つの紐を長くした小風呂敷で下駄を包んで、右の長い紐で結へて渡すといふ趣向であつた。——これがなか／＼當時評判となり、下駄を洗つてくれる芝居と、鳥熊の名が宣傳された。今日大阪で實行してゐる新聞包みの下駄が風呂敷包みであつたわけだ。

場内八分が、「しきり無し」は、大阪でいふ「入込」制度である。またマッチ箱の上にブリキで小笠の付いてあるマッチの大きさの藁の吸殻入れが二錢で賣られた。これには、岡持のやうになつてゐて、俳優の屋號とその紋所が朱で書いてある。——これが上等で、一錢の安い方だとマッチ一箱と竹筒を賣つた。正面と西棧敷には、

おちや せつたい

このところ ぜにいらす

などの貼札があるといふ風であつた。五月一日から、七月三十日までの第一期興行の狂言を記しておかう。

△明治十八年五月一日より

「鳥熊」の春木座興行の記録

前「菅原傳授手習鑑」 如茂堤から寺小屋まで

中「恩愛雪宗清」 伏見の里

切「男競三國湊」 新湯茶屋から堂島松尾の内まで

(傘の立廻り大評判)

△同五月十六日より

前「鏡山舊錦繪」 六幕

中「鎌倉三代記」 三浦閑居の場

切「敵討北國梅」 二幕

(宮本左門之助ひゝ退治の場、市川福六のひゝ大當り)

△六月吉日より

前「姫競双葉繪双紙」 六幕

中「近江源氏先陣館」 一幕

切「須磨都源平躑躅」 一幕

この興行限り (市川小延童名古屋へ歸り、中村竹五郎四谷桐座へ行く)

△同七月一日より

前「伽羅先代萩」 大序から對決まで

中「再源平琵琶景清」 一幕

切「國性爺合戦」 虎狩から甘輝館まで

(この時嵐芳珥登り、市川福六と兩人虎大當り、女形中村鹿昇抜ける)

△同七月十六日より

「假名手本忠臣藏」 大序より九段目まで

(三十日打揚げ、一同横濱へ乗込み、九月東京へ立戻り春木座再開場)

更らに興行法の改良

再度の春木座開場に際して、客扱ひに再び新味を見せた。従來の芝居見物の繁雜から手軽に輕便にといふのが、鳥熊の興行法であつた。當時市中に散布した鳥熊の春木座の宣傳ビラを左に掲げると、興行法が一目瞭然する。

春 木 座 きそくがき (原文のまま)

一 御きやくさまへ御べんりのよろしきよふ、このたびこやうち(小屋内)におゐて めじるしのきものをきせたるおんなをやとゐ、そのものはみなく、こやのうちにいるあひだはおむめともふしますゆ

「鳥熊」の春木座興行の記録

へ ちやべんとふそのほか なにごとによらず よふじ 用事)がありましたら御念入りよなく申つけ
下され候

一 ちややわかいしゆ ならびにでかたのものとふ(等)は一せつ中へわまわらしませぬ そのわけは
せつかくおきやくさまが一日御ゆくわいに御こしになつてもちややわかいしゆでかたがあつてはあれに
は しゆぎ(祝儀)はいくらやろふとかおほしめすとかいつて暇ほふよふになりませぬゆへ かよふの
きそくにいたし候ゆへ用事がありましたらおむめとよんで御つかい下され しかし此おんなとても御し
ゆぎとふ(等)はもらわぬきそくゆへ もしもろふたものがありましたら すぐはいしてしまふきそく
ゆへ それではそのものゝがいになりますゆへ けつして御しゆぎ御むよう(無用)になし下され
一 どまはせんじつより ろりませぬ あさはやい御かたよりよろしいところへすわらせませす しかし
さじきの義はせんじつよりうりまする

右きそくに相さだめ候に付はやくよりいくども御こし下さるよふねがいあげたてまつり候

といふのだ。今日チップ辭退、棧敷前賣、椅子席當日行き次第の先驅である。そしてこの劇場内
雇女——お梅、どれもこれも皆お梅でその目標として、揃への浴衣を上にはをらせる、その浴衣
地は淺黄で、白で縦に三本筋を引き、その間に梅の模様を散らし、前垂は紫メリンス、裏緋で、
白で「おひめ」と縫うてあるのを締めて立働かした。

また幕外へ各幕毎に一間に三尺の布に

「このまくわ 十ぶんであきます」

と揭示した。俄雨の時にも幕外へ出した貼札には次の如くある。

どなたでも御かへりのせつ からかさがいりますから かいねだんが七せん五りん（七錢五厘）ゆゑ
右ねだんでうります 御ふよふ（御不用）のせつは御ぢさんなされたら七せん五りんおかへし申ます
けつして そんりよ（損料）わいりませぬ

といふ勉強ぶり、今日大阪道頓堀の各座で、雨傘の木戸賣りをやつてゐるが、今日のは時價より少々足許を見て二割方高く、又買戻しに應じないのに比較すると、鳥熊の方が勉強してゐた。また大阪で一時傘の原價を預り傘を持参すると返金する方法で、この傘に廣告をとつた人があつたが、劇場で認めないといふので、實行されなかつた事があるが、鳥熊はこの早い時代に太夫元自らがこの俄雨の傘のサービスを實施したのは偉い。

今、再度の春木座開演の明治十八年九月から翌年三月まで春木座の鳥熊興行没落までの狂言と俳優の出入とを左に表示しておかう。

△明治十八年九月 日より

「鳥熊」の春木座興行の記録

近世演劇雜考

三四〇

「小笠原流禮忠孝」 大序より大詰まで

「戀女房染分手綱」 道中双六の場

新加入 (立役) 實川七百藏 (同) 嵐笑三郎 (同) 市川蝦十郎

(同) 市川鬼助 (同) 嵐播利松 (同) 市川駒太郎

(女形) 中村梅太郎 (立役) 中村芝鶴

△同九月 日より

「妻乞鹿浮佐野蠻」 大序から大詰まで

「奈須與市西海視」 乳母争 上下

この興行限りで中村鶴藏抜ける

△同十月 日より

一番目「伊賀越道中双六」 四幕

中幕「源平布引瀧」 二幕

切「鬼一法眼三略卷」 二幕

△同十月 日より

「晋大岡公戴實録」 大序から大詰まで

△同十一月 日より

「ひらかな盛衰記」 源太勘當より逆櫓まで
「お染 久松戀 讀 販」 四幕

この興行限りで 市川鯉之丞、澤村國五郎、中村金瑚郎、市川福六ぬける、四谷桐座入り、
中村竹五郎一座へ加はる

中村芝翫門人 中村翫太郎事淺尾國五郎と改め當座へ出勤

△同十一月 日より

一番目「本朝廿四孝」 二幕

中幕「摘絞鮮血染野晒」 五幕

切 「夕ざり 伊左衛門 廓文章」 吉田屋の場

この興行中「廓文章」を「一谷嫩軍記」二幕と搦替へ十二月十六日まで興行。

中村駒三郎この興行で抜ける

△明治十九年一月二日より

前「講談岩見武勇傳」 大序から敵討まで七幕

切「倭假名在原系圖」 蘭平物狂の場

主なる俳優 中村芝鶴 市川福之丞 尾上松壽

「烏熊」の春木座興行の記録

中村梅太郎 中村竹三郎 嵐 鱗 昇

木戸四錢にて十時までの入場者に二錢の半札土産

△同一月十七日より

「玉櫛筒箱崎文庫」 大序より對決まで

この月廿四日有栖川一品親王殿下薨去に付三日間休業。その旨を今日新聞（後の都新聞）へ左の如く廣告を載せてゐる。——この種芝居の廣告のこれが始めてであらう。

一當芝居御てうじに付 廿五日廿六日相やすみ廿七日廿八日いたします 廿九日相やすみ三十日より是迄のごとくいたし候ゆへ相かはらず御見物の程偏奉希上候

△二月六日より

一番目「赤穂義士傳」 七幕

中幕「彦山權現誓助太刀」 毛谷村の場

切 「奥州安達原」 祭文の場

この興行から三桁竹五郎、中村福六歸座

△同二月 日より

「君臣船浪宇和島」 發端から仇討まで

△同日より

「兒雷也豪傑談話」 八幕

當興行より中村駒三郎戻る

これで烏熊の春木座が打納めとなつた。棧敷その他上場は景氣のいゝにつれて二度値上げをしてゐる。左に表記しておく。

上京當初	中	頃	終りの頃
東棧敷	九十錢	一	圓 一圓廿錢
高土間	七十五錢		九十錢
平土間	五十錢		六十錢

中茶屋で賣つた食ひ物品目と、定價の判つてゐるのを表記しておく。

いなりすし	五厘	しるこ	一錢六厘	ぞうに	二錢
萩の餅四ツ	二錢	上辨當	六錢	並辨當	四錢
五もく	四錢				

その他 にしめ、すし、かんざし、おもちゃ、菓子、煙草、マツチ。

「烏熊」の春木座興行の記録

何故鳥熊は没落したか

太夫元の三田村熊吉は當時五十四歳。上京した明治十八年には春木座の茶屋吉本方に寄宿してゐたが、後本郷金助町へ一戸を構へた。これだけの興行上の改革——當時因習のなか／＼脱し切れない芝居道にこれだけの簡便な興行法を行つて、何故鳥熊興行は續かなかつたかといふに、外部の觀察によると好景氣に乗じて座中で我まゝに立振舞ふた、茶屋出方を壓制したとの事だが、當時これだけの興行を改革したのだから座中の不評判は尤もだ。そして春木座々付の芝居道の人々と對立葛藤を結んだ末明治十九年春、座元の奥田は鳥熊への賃貸を斷つた。鳥熊興行のヒ、はこゝから這入つた。扱ふ人があつて奥田座元と三田村熊吉との手は切れて、鳥熊の手代舟橋藤輔生山某が改めて借受けた。鳥熊はこれを不服として明治十九年三月十七日の夜熊吉夫婦に妾、手代の龜市といふ兩人で都合五人が身輕に扮裝ち、地境の垣を越え、鎖を破つて樂屋口より春木座へ闖入して占領しようとした。舟橋、生山側の夜番がこの形勢を前から知つて獲物を取つて逆襲した。そして巡行の手に闖入狼藉者として引渡した。理由は鳥熊側にあつたやうだが、夜陰の強行が心證を悪くした。そして示談方の説諭を受けて鳥熊は引とつた。鳥熊は、兄弟分の約ある花

川戸家根屋の彌吉と呼ぶる、俠客安藤彌五郎へ依頼して、乾兒數名をして再び春木座の舞臺、樂屋その他鳥熊が修繕した個所の破壊を企てたので、座元の奥田は穩便にと、これらの付物修理個所を造作として買取る事に話が付いて、鳥熊は春木座から綺麗さつぱり手を引くと共に興行界からも影を没したのであるが、松坂在の高もの屋としての鳥熊が、帝都の眞ン中でのこの新しい興行法は當時目覚ましいものがつた。演劇に貢献した何等の効績は見ないが、興行法としては時代を飛離れた新手であつたから、「鳥熊興行」を記録的に記す事件の如し。(昭和、七、一五)

